

講演

15年戦争期の京大学生運動

—戦争とファシズムに抗した青春—

立命館大学名誉教授 岩井忠熊氏

講師 岩井忠熊氏紹介 松野周治世話人代表



岩井忠熊先生のご紹介をさせていただきます。今日出版されたこの本の奥付にありますように、岩井先生は1922年の熊本生まれということですが、先生が部落問題研究所から出版をされた「戦争を挟んだ年輪―歴史研究者のあゆみ」という本の中でも詳しく

書かれていますように、生まれてすぐに大連に行かれ、そこで育ったということです。そして高等学校は姫路高校に入られ

て、1943年の10月に京都大学文学部国史学科に入学をされました。姫路高等学校で江口朴郎先生から絶対に関東へは行くな。東大の国史の平泉澄はだめだ」と言われ、それで京大を選ばれたと書かれてあります。そして学生の時に海軍に入られて、そこで、特攻隊の下士官として出撃したのですが、乗っていた船が魚雷攻撃によって撃沈され、九死に一生を得て、京大に戻ってこられました。

戦後、様々な科学者運動、特に日本史研究会や民主主義科学者協会などで活躍されましたが、京都大学を卒業して1年だけ京都で高校の教師をして、そのあと立命館大学に奉職されました。そして、研究対象とされた天皇制、明治体制の研究で学界を引っ張ってこられました。

研究の面だけではなく、立命館大学では副学長も務められ、私が立命館大学に奉職した時にも、現役として頑張っておられました。立命館大学では日本経済史の後藤靖先生や岩井先生を中心に、近代日本思想史研究会が行われており、この研究会は今でも続いておりますが、そこでも大変多くのことをお教えいただきました。今日は「15年戦争期における京大学生運動」

ということで、私も楽しみにしております。ぜひいろいろと教えていただきたいと思います。簡単ですが、これで岩井先生の紹介とさせていただきます。

最初にお断りしておきますが、私は1943年10月に京都大学文学部に入学して、12月には海軍に入っていますから、私自身が15年戦争期の京大学生運動に参加したという経験はありません。

京大入学前は姫路高等学校にいたのですが、私の入学する1年前、1940年3月に「姫路高等学校ヒューマニスト同盟事件」と称する事件がありました。そういうことは、あの当時新聞に出ませんし、学校側でも公にしませんから、生徒の間ではひそひそと話されていました。何人かが検挙されましたが、別に「運動」ではありません。戦後に関係者が口をそろえて言ったことですが、「ヒューマニスト同盟」なんてありませんでした。特高がデッチあげた事件です。高校に入学してすぐに漢文の先生が、シュールリアリズムというのは大変怖いものだから、あれには近づいたらいかん」ということを言われたのです。私は今でもシュ

ールリアズムというのは何だかよくわからないのですが、要するに治安維持法で検挙された生徒たちでつくっていた「文芸誌」のなかで、シュールリアズムに影響された意見を述べていた。その当時の特高警察によれば、当時のコミンテルン第7回大会以来の人民戦線戦術は、シュールリアズムという反ファシズム的な傾向をもっている人たちとも、自分たちの仲間として、緒に闘争するんだと言っている。だからシュールリアズムというのは、共産主義と緒に協同している運動だ、という理屈になるわけです。だけど訳も分からずにシュールリアズムを論議していた高校生が捕まえられて、とんでもない犯罪を犯したように言われました。それで漢文の先生はシュールリアズムとは怖いものだと私たちにいわれた。私はその先生の教えを守ったわけではないのですが、以後シュールリアリズムと無縁に暮らして今日に至りました。

どうして15年戦争期の京大学生運動に関心をもつて、何か書こうとする気になったのかといえますと、私は旧制大学を卒業してまもなく、運よく立命館専門学校の特任講師になりました。新制大学に昇格するときに、それまでに、今から見るとほんとに顔が赤くな

るような論文を二つ書いていました。それが業績として、大学の講師に移行することが認められまして、旧制大学を卒業して、1年目で旧制専門学校教師になり、2年目で大学の教師になったという非常に就職運のいい人間です。

それで39年間も立命館に勤めました。そこで出会った先生たち、いろいろ批判もある人たちですが、奈良本辰也先生、林屋辰三郎先生、前田一良先生、北山茂夫先生など、後で教授になる錚々たる大家の下で、その時にいろいろ聞いた話が忘れ難いわけです。といいますのは、戦争中に、私が戦争に少し批判的な見解を話すことができたのは、高校時代の江口朴郎先生との二人だけの時でした。さすがに江口先生もみんな大勢集まっているところでその話はしなかった。ちよつとサゼスチョンを与えるようなことはありましたが、私はそれにちよつと惹かれて、本当は江口さんが言おうとしているのは、日本は中国と戦争して勝てないんだよ、ということをおうとしているんじゃないだろうかと思つて、一人で江口先生の家に行つて話したら、果たしてそうでした。江口先生の書棚の表には文学の全集はつきりがあった。その書棚の後方にはマルクス

エンゲルス、レーニン全集があった。そういうことがあつて、だんだん分かつてきました。納得のいく日本史を学びたいと思つて、東大文学部へ行くかと思つていたら、東大には平泉澄というとてもないウルトラ右翼がいるから、あんなところに行つたらいかんと言われたのです。それでは次に京大に行こうかと思つて、京大にきたということです。

非戦的だった先輩たち

立命館で出会った先生たちの話は、私が経験した学生生活と全然違ふ次元の話です。一つご紹介いたしますと、今でも京都市美術館の敷地の隅に独立した建物がありますが、ここに「京都市史編纂所」があつて、先生たちはそこに勤めていました。その主任は京大の国史学の西田直二郎教授で、すごい博識で有能な人でしたが、他面では札つきの右翼です。ところが主任は何か月に1回くらいしか顔を出さないの、みな勝手にやっていました。戦時中の思い出話に、この戦争は負けるという話をしていたということが出てくるのです。前田、林屋、奈良本の3教授の昔話です。これはどういふことなのだろう。あそこは京大ではないが、

京大の延長というか、周辺みたいなところですよ。そこにそんな自由な空間が戦時中にもあったんだろうかと不思議に思いました。

事情がいろいろありまして、私がお世話になった方ですが、岩国出身だった山内彦彦先生という京大の理学部の動物学科の講師は、無給講師だけど教授並みの研究室を構えていました。大塩田地主で生活に不安がないから、京大は無給で一人教授を雇っていたようなものです。だんだん分かってきたのは、山内先生は戦争中から非常にはつきりした戦争に対する批判をその周辺に言っておられた。高橋松蔵先生も非常勤講師でおられて、日本軍が負けたという情報が入ると2人が祝宴を開いていたということを知りまして、私は愕然としました。それまで私が歩んできたところで、どこにも見なかったようなことが、大学の表とは別に、大学の周辺にあったんだなということを感じました。例えば、野間宏という方は1938年の仏文科の卒業生です。あの人が有名になったのは、『小説 暗い絵』だと思いますが、このなかで学生生活動家が登場してきます。いつの機会だったかはつきり憶えていませんが、先輩が集まった席で、あれは君だろうとか、あれは違

うとか、あれは誰だとかの言い合いをしている場に居合わせたことがあります。それからいろいろな資料を読んだり、先輩と付き合いをしていると、私にも、これはどうもあの人だろうということが分かってくるわけです。

野間さんの作品に、わが塔はそこに立つ」というかなり長い小説がありますが、その中に出てくる人物になると、もつとはつきりと分かる人がいます。野間さんの小説に出てくる学生生活動家は、たいてい何人かを一人に合成していますから、誰と一人に特定できない場合が多いのですが、わが塔はそこに立つ」では、誰かがはつきり分かります。それは藤谷俊雄さんです。あの方は真宗の寺の住職をしておられて、高知高等学校の卒業生で、学生評論事件で検挙され、懲役2年・執行猶予3年とかになった方です。戦後に立命館日本史の非常勤講師をお願いして、私も接触が非常に多かった。間違はなくその人物、つまり、高知校出身の、みんなから坊主、坊主と言われていた真宗の寺の息子の、背が高く、頬がそけて、顔の長い学生」と言ったら、その頃を知っている人たちは皆笑み出すのですが、間違いなく藤谷さんが登場しています。小説の終

わりに、この小説を書くにあたって、いろんな戦争中の学生運動のことを確かめるために、藤谷俊雄氏の援助を得た」とわざわざ書いてあるんです。つまり顔まで思い出せる先輩がほかにもいるわけです。

哲学の森信成という人もずいぶん変わった人でした。それから京大文学部の国史専攻を卒業しながら大阪市大の経済学部教授になった小野義彦さんとか、先輩でみな付き合いのあった方々です。あの人は相当いろんな運動をやっていた、私が立命館で付き合った先輩の先生たちは、その人たちの運動の周辺で、それに協力していた人たちです。だから、この戦争は負けるんだと平然と言いついていたということがあったんです。

ところが今、そういうことが全部忘れられていきつつあるんじゃないか。その人たちの顔を思い浮かべながら、その人たちとの接点をもっていたのは、私ぐらいの世代で申し訳ないかと、これは書いておかないといけないと思つて書き始めたのが、この本です。

『日本帝国主義と戦争』

一つ言いたいの、河上肇先生が1928年の3・

15事件の責任を取らされて、経済学部教授会から辞職を要求されて、辞められた。そして最後には地下に潜られているんですが、それと関連してゐることですが、何故学生が大勢それに引っかけられたのか。3・15で検挙された人はずいぶんいるわけです。それを河上肇先生一人の影響というのはおかしいと思う。やはり、その底にあったのは何かというと、コミンテルンが日本の共産党に關して出した「27年テーゼ」と「32年テーゼ」の影響があると思います。

「27年テーゼ」も「32年テーゼ」も、「1段階戦略」とか「2段階戦略」などの議論もありますが、その議論に私はあまり関心がありません。どちらのテーゼも、第1章は「日本帝国主義と戦争」という題で始まる。「27年テーゼ」では中国への領土拡張戦争が切迫しているということをいついて、果たしてその翌年の28年に、張作霖爆殺事件、山東出兵です。

そして「32年テーゼ」はどうして伝わったかという、河上肇先生の所に外国から郵便で配達された。それを受け取つて党の中央に連絡して、河上先生自身が翻訳されたのが、「32年テーゼ」です。そこにはどう書いているか。その前年の31年に柳条湖事件があり、

32年には上海事変があつた。警告は正に実現したので。これから太平洋制覇の新戦争が起ころうということ。32年テーゼ」はいつている。これは実に正しい見通しだったと言わざるをえません。

いろいろ問題はあるのでしようが、2つのテーゼの第1章は、非常に重要な意味をもっていたのです。私はそのテーゼを「一般の学生たちは知りえたか」というと知つていなかったと思います。当時活動家だった人、後で聞いたことがあるのですが、テーゼを誰かに見せてもらつて、読み終わつたらさつと返した。持つていくことが分かつたら、あるいはノートに書いていたら、とんでもない目に遭うから、非常に危険なことだった。ただテーゼが言おうとしていることはだいたい理解したという話でした。テーゼを見たかどうかはともかくとして、そういう世界情勢の見かたは、当時の総合雑誌をみるとその中に、見通しはすでに出ています。だからそういう問題について関心をもち、その見通しに同調していた学生、知識人はかなり広範囲にいただろうと思われまゝ。

滝川事件と高代会議

そのなかで33年に滝川事件が起きます。事件の詳細は省略しますが、滝川先生の「刑法読本」はけしからんという話で、マルクス主義的であり、共産主義的であるということが、最後の文官高等分限委員会での決定のなかにあります。これが公的理由になり、休職が発令されました。それに抗議して、佐々木惣一先生、末川博先生、恒藤恭先生たちをはじめ、教授会全体が辞表を出した事件です。そこから抜けた人もいたけれども、最後まで節を貫いた教授が7人いました。

この事件に対して、法学部と経済学部の学生を中心として非常に大きな反対運動がおこりました。滝川先生は法学部の先生ですから、法学部の学生からおこるのはよく分かります。当時の学生の常識として、教授の思想を問題にして罷免するというのはこれはそもそも間違ひです。滝川先生の講義をきいた学生からいえば、どうみたつて滝川先生はマルクス主義者じゃない。講義を聴いた人は皆わかります。滝川先生は、ただちよつと癖があつて、よけいなことをいふんです。天皇君が刀をもつて、君を殺そうと思つてかかつてきたと

きに、君は抵抗したら、君は正当防衛になるかならんか」ということを、授業中に例として話されたそうです。あの頃、そんな例を話す人はいないと思うのですが、家庭内での夫婦間の話で、階級闘争という言葉で表現したりされる。階級闘争はマルクス主義だと、そういう誤解をうける。文部省とか司法省の司法試験の委員をしている滝川という男はけしからん男だ、ということで、国粋主義者がわあわあ言って、国会で問題になり、質問するような議員がいて、滝川さんを首にしたというのが本当のところでしょう。

この経過を知っている法学部の学生からみたら、あほらしい。何で滝川さんがマルクス主義者なんだと当然思いますね。出鱈目きわまりない。それに対する反対がおこるのは当然です。当時の京大総長は小西さんという教育学の先生ですが、法学部は宮本英雄法学部長を中心に団結していました。小西さんも突き上げがあったから、それなりに頑張っているんです。いきさつはいろいろありますけども、文部省に対して、滝川さんが首になることを承認したことは「一遍もありません。そういう総長、法学部教授会の態度があつたので、それに対する学生の反対運動」というものを大学当局は

公認していました。例えば、反対運動の集会のための教室の使用に許可を与えたというのが、当時の京大の当局の態度だった。

それに対してどういう反対運動を展開したかという、それが「高代会議」になるわけです。正式にいえば「高等学校同窓会代表者会議」を縮めた名前です。当時京大の学生のおそらく90%以上は旧制高等学校の卒業生でした。その当時、高等学校は国立30校、私立4校、公立2校があり、それに準ずる学習院の高等科があつて、高等学校と同等と見做されていました。そこから入ってきた高等学校出身の人たちは、ほとんど寮生活をしていましたから、同じ釜の飯を食うという極めて親しい関係がありました。

大体学生数の多いのは、どこの大学でも法学部でした。今は法学部・経済学部のゼミナールが必修だと思えますが、その頃はゼミナールは必修ではなかった。少人数で学生が集まつて友人になるといったことはほとんどなかった。法経では大教室で顔を合わせたら、挨拶程度はしましたが、あまり深い付き合いはなかった。旧制高校時代の同級生が集まつて、下宿でだべっていたり、そういう関係が続いていました。この連

中が集まって、高代会議」をやっていました。そのなかには高等学校で左翼運動に関わった人がかなりいました。

思想による前歴があつて処分された連中が警戒したのはスパイです。その当時、接触してビラを渡してくれた人はいるんだけど、名前は本名ではない。どんな思想をもち、どんな仕事をしているのか全然知らない。そういう人たちはスパイを非常に警戒していましたから、大学に入ってきて、高等学校の同窓生と親しく交際して、こいつにスパイはできないと分かると安心できる。それでここではかなり自由に討論して思うことを言つて、しかも相互信頼があつた。その中には思想的にはいろんな人がいました。学生大会の議長をした渡辺貞之助という人は法学部の学生でしたが、写真が残っています。長い山羊髭を生やし、長髪で年中和服を着て歩いていました。当時の世間の常識では、右翼じゃないかと思われる風体ですが、右翼じゃなくて左翼でもなくて、自由主義的学生でした。

こういう人たちが怒つたらどういう活動をするか。渡辺貞之助さんは大事な役割を果たします。相談した一人は、戦後、関西学院大学の教授をされた一圓一億

さんです。高知高等学校からきて、大学入学後に検挙されて停学になった。停学処分中に大学の構内に入り出したことがばれると永久に放学になるので、大学に入りできません。一円さんは高校同窓の渡辺さんに対し、高代会議をやるといって勧めたそうです。もう一人、高知高等学校出身の長尾さんがおられました。高等学校の活動歴で処分され、遅れて高等学校を卒業して、大学に入ってから組織的な活動は何もしていなかった。その人が渡辺に勧めたのも「高代会議」をやるうじゃないかということでした。

渡辺という人は法学部の名物学生でしたから、顔が広いんです。渡辺はこの高等学校の出身者でも知っていました。渡辺の呼びかけで、各高等学校別に高代会議が開かれ、渡辺が議長格でまとめ役をするという運動のスタイルが出てきました。だから左翼もおれば、自由主義者も、左翼といつても本当の左翼組織の人はいませんでした。左翼思想をもった学生はいましたが。

学生運動と左翼組織

1930年2月事件で京大生が62人検挙されてい

ます。三高が26人、同志社が10人、その他で、京都学生共産党事件と称されているのは、検挙されたほとんどが学生だったからです。その次に1932年8月から33年4月にかけて逮捕された京大生の活動的な学生が95人いた。矢継ぎ早にやられた。この人たちはどういう人たちかというとき、共青、共産青年同盟、関係当時の文化団体、プロレタリア科学などに係わった活動家が目をつけられ検挙された。その結果、滝川先生がクビになったのが5月26日です。運動が盛んだったとき、京都の共青の府委員会が把握していたのは京大生の中にいた共青は1人だけでした。4月に文学部に入ってきた「高出身の高木養根、やすね、戦後日本航空の社長をした人ですが、この人1人だけだった。たった1人だけしかない京大生の共青を共青の京都府委員会がどう使ったか」と、労働組合のオルグに派遣していて、大学の中に共青はゼロでした。高代会議」という形での少々共産主義の思想的影響を受けた学生もいましたが、組織的には何もない。それと、自由主義的な学生とが手を握って「高代会議」を中心とする運動を展開しました。左翼組織なき学生運動というのが実態でした。

滝川事件が起こるとすぐに、京大にいた学生が何人か東京に飛んでいって、高校の時の同窓生がいっぱいいますから、東大の彼らに働きかけています。今でもその痕跡があると思いますが、昔は本郷に高等御下宿という、あまり高等でない下宿が看板を掲げて並んでいました。私も旧制高校の時代にそこにお世話になったことがあります。東京では学生下宿というのはまたかない付きですから、そこへ行ったら飯は食わせてくれる。京都から来たかということで同窓生たちが沢山集まってきて、これはやらなきゃいかんということになっていった。

この頃の東大では共青が健在でした。東大共青の機関紙「赤門戦士」というのは、愛称は「お嬢さん」というのだそうですが、お嬢さんが600部も出ていたと言います。今から見ると、こんな人がという人たちが読者にはいました。だから東大では京大なみにワーツと大きく盛り上がりました。

京大では大学公認で集会に教室を使いましたけれども東大ではそういうことはできませんでした。そこで集まるためにはどうしたのかというと喫茶店を借りたり、蕎麦屋の2階を借りたりしていましたが、その当

時の喫茶店なんかというのは、警察と通じていましたから、当時3人以上集まったら集会ということでした。ちまちま警察が飛んできて、無届集会だ、いうことで中心になった人物が警察に持っているわけなんです。

こういう弾圧をくらいつながら、東大ではものすごく盛り上がりました。というのは、図書館の前に大きな芝生があつて、昼休みになると学生がそれぞれ集まつてきて、普段からよく顔を合わせる場所になつていたわけです。そこに普段以上に学生が集まつてきて、京大の情勢についていろいろ聞くわけです。そこに非合法のビラが配られます。こうした東大での成り行きの詳細は1985年に新潮社から出た「私たちの滝川事件」という本に詳しく出ていますので省略いたします。なぜ新潮社かというと、新潮社の重役が当時のそうした仲間の1人であつたということです。

京大から東京へ沢山行きましたけれども、そうした中で、京大でも共青を再建をしなければならぬ、という声があがつて、その話を持ってきた人が当時法学部において、あとで文学部に変つた人で、戦後、中日新聞の論説委員をされた鈴木光次さんでした。

その方が京都に帰つてきて中心になつて、高木氏を

含めて高校時代に経験のある人たちを探し出して14人を集めました。集まつて組織ができた時に、すぐに弾圧をされて、結局何もする暇もなく、捕まえられたそうです。ですから、京大では共青の運動は何も発展をしないで、学生運動の指導組織というものはありませんでした。高代会議の中でみんなで知恵を絞つて、こういうことをしてはどうか、というような形で運動を進めたわけです。

滝川事件があつてそのあと、何人かの法学部教官たちが復職をしましたが、その後、小西総長が責任を感じて辞任された後に、松井元勲さんが総長になります。この人が総長になりますとすぐに高代会議の解散を命じて教室を貸さないなどといった弾圧に転換をしてきました。ですから、表向きは高代会議は解散をしたということになっています。高代会議の解散の記念写真まで撮っていますが、どうもそれは表向きだけであつて、そこで知り合つた活動家たちは互いに連絡を取り合つて、実質的には高代会議はあつたようです。そういう人たちが集まつて作つたのが「三六会」という、滝川先生がクビになつた5月26日を記念してつけた名前の会です。この「三六会」と旧高代会議の活動的

メンバーたちとの間に連絡があったらしいのです。

二天会と京都帝国大学新聞

そこが中心になってどういう事をやったかと言いま
すと、この運動を通じて出来上がった学生間の連帯は
続けなければならない。そこで、やはり学生たちは大
学に勉強しようと思つてきているわけですから、勉強
することを中心とした連帯でなければいけないという
ことになって、同窓会別の研究会というものを作るわ
けです。

そこではマルクス主義経済学の初歩的な教科書など
を使って、例えばローザ・ルクセンブルクの経済学入
門の教科書とか「賃労働と資本」といったものもあつ
たようです。法学部の学生たちは法理研究会とか、公
法研究会とか、法学部の研究会は学内では開かれな
いでもつばら楽友会館でやっていたようです。というの
はこういう研究会には、滝川事件で抗議して辞職をし
た先生方も出てくるわけです。滝川先生も末川先生も
佐々木先生も来ていたようです。そうすると大学の中
ではできません。

こういう形で専門別研究会というのが続けられ、と

ても盛んになりました。もう長いこと入ったことがあ
りませんが、法経の新館地下には学生たちのたまり場
がありますが、そこには各研究会の予告のビラが、と
ても多く張られていたといひます。

さらに見てみますと、京都帝国大学新聞というのが
出されていて、これには大学当局の援助があつた
わけですが、新聞部長というのがいました。その部長
というのは、残念ながら私の恩師であつた西田直一
先生でした。大学の総長が変わり、大学の方針が変わ
りますと、西田部長が、滝川事件に関する一切の報道
や論評は禁止する」という方針を申し渡したわけです。
これはひどい話だと思ひますが、実際に編集の一切を
やっていたのは学生たちなので、みんなとても怒りま
して、当時の編集部員たちが、斉に総辞職してしま
いました。そのあと、新しい部員として学生たちが募集
されて入ってきましたが、実際には「二天会」からも
入つていったようです。そこで知らん顔をして、これ
までと同じような編集方針で新聞を出そうと機会をう
かがつたわけです。

「二天会」というのは滝川事件を記念する会ですか
ら、毎年のように5月26日に行事を行うといふことが

会の重要な仕事でした。これは「三六会」が直接に方針を出したのではないということになっていますが、中に勇ましい学生がいるわけです。1934年、つまり滝川事件の翌年の5月26日に、当時法経新館と言われた建物の上から「想起せよ！五・二六」という垂れ幕を出しました。「一般の新聞社の方も、この日は何か起こりそうだということで、多くの新聞記者がその場に来ていまして、当然写真を撮り、その記事が翌朝の新聞に大きく出ています。京都帝国大学新聞もその写真を大きく出そうとしたら、西田新聞部長から「報道禁止」と言われます。それでは様にならないわけです。一般新聞が大きく報道しているのに、京大新聞が全くこの記事を出せない。当時こういった類のことがありました。この垂れ幕を下ろした3人の学生は無期停学になりました。

その当時の学生たちは、高代会議などにしても、とても民主的な運営をしていました。久野収さんという方は当時哲学科の3回生で、私も存じ上げている哲学者ですが、あの方は生涯マルクス主義者だったことは一度もなかったと思います。むしろマルクス主義に対して批判的な立場だったということがはつきりとして

いる方です。この人が高代会議などに出て、その運営の仕方がとても民主的だったということに感銘を受けて、当時、大学院の先輩であった中井正一さんに大変面白い、と言っています。中井さんは、自分も出席をしてみても感心したと言っていて、それが、『中井正一評論集』岩波文庫の「委員会の論理」に影響しています。彼は洛北消費生活協同組合の活動に参加した経緯と、京大の高代会議の討議を見た経緯を基礎にしてあの論文を書いていくわけです。

今で言えば、委員会の運営についての論文など哲学のテーマになるのか、ということにもなりますが、その当時としてはそういう論文が意義があったと思われる。この論文はそういう功績を持っていると思います。中井さんは早くにお亡くなりになりましたけれども。

そういう中で運動を継続していくために、どういう方針をとったかというところ、一つはスパイを非常に警戒をする。非合法組織との接触については、実態が分からないわけですから、非常に慎重でした。それから、機関紙を出さない。それまでの経緯で機関紙を出しますと、5カ月でだいたい関係者全員検挙されてしまう、

というのが高校時代から活動してきた経験則だったわけですね。そういう方針でやっていったところに、1935年のコミンテルン第7回大会で、有名なディミトロフの統一戦線に関する戦術に関する提案があつて、初めて「反ファシズム人民戦線」という方針が正式に提起されます。それがやがて日本に入ってきて、それまで滝川事件以降の運動を続けてきた学生たちの目にも触れるようになりました。それを読んだ当時の学生たちはどう思ったかと言いますと、なんだ今更、俺たちは、すでにその方針でやって来たんだ、ということを知り始めて自覚したと戦後に言っています。これはとても大事なことだったと思います。と言いますのは、1935年の2月にはすでに赤旗が停止となつています。3月には最後の中央委員として残っていた袴田里見という人も逮捕されてしまいます。組織としての日本共産党というのは、この時からなくなつていきます。そういう状態になつても、それではどうするんだ、ということになりますが、統一戦線というのはとても大切なことから、自分たちだけでもやろうという気構えを持っていたわけです。

京大ケルンと学生友会民主化路線

じつは、この1936〜37年ごろの時期は京大にとつては左翼的な学生の運動の花盛りだったといえます。というのは、合法的な研究会という形で取り組んだ学生の運動が、相当な規模で発展していた時期で、だいたひ把握していた研究会が、全学で30くらいあったそうです。ほとんどの研究会に、三六会がそこに世話役を派遣していました。

そういう運動の中で、次第に中心が文学部になつて行きました。その事情を説明しますと、当時、京大に入学するのは旧制高校の卒業生が主体でした。文系でも法学部や経済学部は入学試験を受けないと入れませんでした。その入学試験で旧制高校で処分を受けた学生たちがどういう扱いを受けたのかは私にはよくわかりません。文学部は入学試験などはありませんから、処分の経験者はどうも入学試験を敬遠して文学部に入つたようです。

それから、旧制高校で退学処分になつた人たちが復活する道筋がありまして、それが高等学校卒業資格検定試験という制度で、この試験というのが40科目以上

ありまして、体操まで試験があったということです。

入学試験以上にはるかに難しい試験ですが、この試験に通つても、東大は全面的に入れませんでした。京大でも法、経済学部には入れませんでした。文学部には入れました。戦後、京都市会で活躍された山田幸次さんもこの検定試験で文学部仏文科に入つておられます。小野義彦さんの表現ですが、傷モノが文学部に集まりました。闘争経験ゆたかな学生が集まつて、自然に京大全体の学生運動の指導部みたいな役割を果たすようになりました。そこで誰言うともなく、京大ケルン」といわれるようになりました。高い山に登ると石を重ねた塔がありますが、あれがケルンです。京大ケルン」の方針は、機関紙は出さない、合法的な研究会をつくっていく」ということでした。

1936年といいますと、東京では2・26事件が起きて、戒厳令がしかれているのですが、京都では宇治の平等院と花屋敷の2つの集会所が開かれています。平等院の集会所は昼間公然とした記念行事が行われて、だれかの講演を聴いて平穩に解散したらしい。ただ、野間宏さんのわが塔はここに立つ」という小説には、その非合法集会所に100人も学生が集まっていたとこ

ろ、宇治市の警察官が襲撃してくるぞ」といわれて逃げ惑い、野間氏も慌てて靴を一つ無くした、というこゝとまで書いているのですが、これは彼のフィクションらしくて、本当は静穏な集会所で終わつたらしい。

ところが、長尾一郎さんという方は四條畷の共産党の市会議員をされた方でしたが、この方が書かれた記録によりますと、夜の集会所では、先輩から面白いところと連れて行つてやるから俺について来い」と言われてついていったところが山宣の実家だった料亭の花屋敷だった。花屋敷というのは学生が飲みに行けるような安いところではありません。その花屋敷で飲食をするのではなくて、入つて行きますと女中さんが案内してくれて、いきますと百畳敷くらいの大広間で学生が集まっていた。これは花屋敷が好意的に学生に場所を貸してくれたんですね。そこに当時活動的な学生だった人たちが集まつたわけです。その後、その集まりは第2回高代会議だったというふうにも聞いている、と長尾さんは書いているのですが、よくわかりません。とにかく、そこで討議されたことは、それまでの京大の学生運動にとつて、老人組と新人組という二つの流れがあつて、京大の学友会というのはすでに大学に

握られていて、大学の手先になっていたので、学友会費を払うと大学の学生課が間に入って、運動クラブなどのためにすべて使ってしまう。自分たち一般学生には何も回ってこない。だからあれをポイコットしよう」という考え方が老人組の方針だったわけです。

ところが、新しく入ってきた新人組という人たちの考え方というのは、そういうポイコットの方針ではなく、むしろ学友会の民主化を進めるべきではないか。形だけに終わっている代議員の選挙も学生が主導権を握って研究会に対する助成などもすべきではないか」という意見でした。これが大勢となって学友会を民主化しようという方針でいこうということになりました。

これが花屋敷で夜開かれた秘密の集会での結論です。花屋敷での夜の秘密集会に出た活動家たちは、非常に元気が出たそうですが、「部では、東京で戒厳令が出ている時に、こんなことをやっては危ないのではないか」という意見もあつたそうです。京都では戒厳令はありませんでした。

京都学生祭「1937-5-26」

この会議では、3人の代議員を出そうということに

なつたのですが、民主的な立場を取る代議員が全体で3分の2くらい選出されたそうです。そこで、それを基盤にして力を入れて準備をしたのが、1937年5月26日の「京都学生祭」ということですが、これは準備に半年かかったといわれています。京都の朝日会館の上に当時映画などを上映した会場がありました。その集会場としては当時はそこが最高の会場でした。その会場は2000席ですが、入場料とって2000人集めたといわれています。

この5月26日の集会では末川博先生が講演しています。当時、林銑十郎首相というひげを生やした陸軍大將が、政教一致とか訳のわからないことを言っていました。これを末川先生が上手に批判して学生たちを熱狂させたということです。講演会ではあまり聞いたことがないのですが、終わった後に、末川先生は演劇などでやられるカーテンロールで何回も呼び出されたそうです。学生たちは「反ファシズム万歳」、大戦線万歳、それから「末川先生万歳」という声もあつたらしい。もちろん会場には特高警察も来ていましたが、熱狂している学生たちを2、3人の特高警察では抑えることはできません。

学生たちは、それだけでは収まらないで、会場から出て河原町三条から四条まで無届のデモをやったわけです。これが1937年5月26日の出来事です。それから1週間後に林銑十郎内閣が倒れて、第一次近衛内閣ができますが、その後間もなく、7月7日に盧溝橋事件が発生します。つまり盧溝橋事件の発生のひと月半ほど前に、京都でこのような運動が起きていたわけです。それを学生が組織した。滝川事件後に入ってきた学生たちの反ファシシヨの運動の最高の盛り上がりがここにあつたと思います。にもかかわらず盧溝橋事件以降、弾圧が非常に厳しくなってきます。内閣は国民精神総動員という方針を出しますが、11月に学生評論」が弾圧され、この時に「土曜日」などに関わっていた新村猛さんとか能勢克男さんとか関係者が多数検挙されています。

自由主義は共産主義の温床」という弾圧

1933年の9月には、京都帝国大学新聞に対する西田直次郎部長からの弾圧がありまして、滝川事件を回顧したような記事は一切禁止するという指示に対して、後から入ってきた編集部員たちは抗議声明を発表

して退会してしまいました。そういうことであれば、学外に根拠をおいて何か出そうという話になり、新聞というのは少し荷が重いから雑誌にしよう」ということで「学生評論」を出版することになりました。それも念のいったことに、京都ではなくて大阪の出版社からということにしました。実際にその編集部というのは、全員が「三六会」とか高代会議から出ています。

学生評論」は1936年5月に発刊されましたが、その翌年の11月と翌冬の6月にかけて第1次、第2次の検挙がされています。それまでの運動は絶対に合法主義という方針で、そのことは「世界文化」や「土曜日」の場合もそうだったわけですが、「学生評論」は1回も検閲の中で注意とか削除とか発売禁止などといったことは一切ありませんでした。完全に合法的に検閲を通じていましたが、それが検挙されたわけです。

警察で「あなたたちはすべて合法だと認めてきたのではありませんか」と言ったのですが、個々の発行号を見たらそうだけれども、全体として見たらこれは治安維持法違反に該当する」と言われたそうです。というのは、取り締まり当局の方針が治安維持法の解釈だけではなく、運用の仕方がだんだんと変わってきてい

ました。初めは「国体の変革」とか「私有財産の否定」とかいったことを目的とする結社を扇動したものを弾圧するといったことでしたが、次第にこれではだめだということになってきて、「目的遂行罪」ということが出て参りました。「目的遂行罪」というのは、当時の共産党や共産主義青年同盟、全国協議会といった労働組合や、その他の団体と何の関わりもないところでの運動であっても、心の中のどこかでこれらを援助してやるうと思っていたら、そのこと自身が罪だということとで、「目的遂行罪」の適用となります。ですから私も親しくお付き合いをさせていただいた同志社大学の和田洋一先生も「世界文化」同人として特高に逮捕されました。あの方は大体マルクス主義というようなものなどはあまり読んだことがなかったのです。ただトーマス・マンのような作家がナチスドイツに迫害された事に対して、非常に不満を持たれて、反ファシズムの運動に関心を持ったのだと言われていました。だから、トーマス・マンなどのような亡命作家の活動を紹介する文章を「世界文化」に書いておられました。この和田先生が逮捕されて特高に、お前はマルクス主義のことをちっとも知らないじゃないか」といって叱ら

れたそうです。実は特高の方がよく知っていて、自分は共産主義社会実現のために書いたんだ」ということを一つ一つの文章について理由づけを書け、と言われてましたが、とても無理な話でした。当時下鴨警察署などでは、みんなヒナ型にそったそのような転向上申書のようなものを書かされました。そういった上申書ができましたらみんなあっちへ行け、ということで太秦警察署に移されたようです。当時の太秦警察署というのは新築で、とても居心地がよかったといわれています。ところが下鴨警察署の特高刑事が太秦警察署に転勤してきて、和田先生に、あなたは共産主義者でもないのに、このままでいたら共産主義者にされて裁判所に送られてしまいますよ。あなたは闘わなければいけないんじゃないですか」と言ったといえます。和田先生は共産主義者ではなかったのに、闘わなきゃいかんと言われても、そんな義理はなかったと言います。それでも予審判事に「二つ一つの事を言われても私は共産主義のことについてはよくわからない。ただ、無意識のうちに共産主義がいいというような意識があったかもしれない」と言ったら、それで喜んで、それだけいい。無意識のうちにでも人間が平等で生活に困

らないで暮らせる社会というのはいいな」という話が、取り締まり当局にとつての証拠になりました。

『学生評論』で合法主義をあくまでも貫こうと言つた最後の1人は、永島孝雄さんという哲字を卒業して京都で演劇活動をしていた人です。この人は非常に慎重で、『学生評論』の編集をしているところに、どこからか「ラムネの作り方」という本が送られてきて、中を開けてみると、デイミトロフの論文だった。それをみんながまわし読みをしていたんですが、永島はそんなことはやめよう」と、そして「これを警察に差し出そう」と言います。要するに、「これは警察かその手先がこれをここに送つてきて、きつとこれを読むだろう。そこでみんなを捕まえるという謀略ではないか。したがつて逆手をとつて、これを警察に差し出した方がいい。それこそが合法性を守ることになる」といいます。しかし、理屈は立つけれども、感情としてついていけない、ということになって、それでは、その文書を元の封筒に入れて封をして、そのまま置いて誰も読まなかったことにしよう、ということになりました。それほど慎重な合法主義者でした。この人も広島高校で処分歴のある人です。

この人があの頃の京大の学生運動の実質的な指導者の1人でした。ところが、最後に逮捕されて、猶予のつかない実刑3年の懲役になります。しかもいさゝい転向には応じないで事実上獄死した人です。この人の場合、もう1つあるのは、単なる『学生評論』だけであったなら執行猶予になったかもしれないですが、じつは春日生次郎の日本共産主義者団から誘いを受けて、はじめは合法主義で抵抗したのですが、本人によるととうとう論争に負けて「団に関つたのです。いったいそのことを誰がばらしたのか、最後まで戦後になつてもわからなかつたそうです。

それとよく似ていたのが有名な労農弁護士布施辰治の息子布施生さんの場合ですが、この人も哲字科の学生で中退しています。この人はやはりはじめは団に抵抗しましたが、論争に負けて団に関わり、逮捕されても相当頑強に口を割らなかつたようです。それ以上のは分からなかつたので、懲役2年執行猶予3年で出てきました。ところが執行猶予になった人には、昔の同志とは付き合つてはいけないなどの条件がついていて、行動の制限がいろいろありました。思想犯保護観察になりますから、保護観察所に出歩いて最近の

状況報告をしなくてはいけないのですが、彼はそれを一切無視して危ない人たちとも付き合いをしました。そして執行猶予取り消しで収監されました。この人は山科の刑務所で獄死しています。この人も非転向といえると思います。よく聞いてみると松本高校時代に細野武勇さん、元立命館総長 などとともに検挙された仲間の一人です。

日本共産主義者団というのは、実際は7カ月しか活動できなかったのですが、あれがよかったのかどうかということの問題が残ります。この人たちは条件をつけて、大学の研究会などに対しては日本共産主義者団は手をつけない。すべて自分たちを通す」という原則を貫きました。ですから団の影響で学内の研究会メンバーが検挙されるということはなく、研究会はつづきました。

末期特高の狂気・京大俳句」と京大学生結核研究会の弾圧

最後に、馬鹿馬鹿しいと思えるのは、京大俳句事件と京大学生結核研究会事件です。ホトトギスや高浜虚子のような花鳥風月、春夏秋冬という季節があつて

伝統的な俳句、春には花、秋には紅葉というようなことでは、現代にの衆の感情を俳句にできないということとで、無季題の新興俳句を主張して、当時京大医学部にいた数人が「京大俳句」という雑誌を出しました。その人たちが中心になって全国の俳人が集まって、かなり有力な流れになっていたのでありますが、それが危険だ、自由というのは共産主義の温床であるということにされて、驚くべきことにその中で3人が懲役2年執行猶予3年の判決を受けています。その影響を受けた人たちの中には、とてもいい俳句を残した人もいます。たとえば、憲兵の前で滑つて転んちゃった」戦争が廊下の奥に立ってゐた」この二つは渡辺白泉という人の作です。

京大学生結核研究会事件ですが、あの当時、国民的な病気であつた結核の克服が大きな課題でした。はじめは八幡製鉄の調査をやりましたが、中途で終わり、次に、福井県勝山で厚生省の後押しもあつて学生14人が取り組んだ調査報告書があります。それは、元体制内での限定出版で「部外秘」の判子を押されたものですが、それが特高の手に入つて、特高によれば、これは戦争が結核を助長しているということを主張しよう

とする文書である」ということになりました。それに
関係して中心になった医学部の学生数人は学友会の代
議員で、学友会の役員をしていましたから、そこに目
をつけたものと思われます。厚生省のバックアップで
出された報告書まで差し押さえられました。すでに陸
軍の軍医になっていた人も軍法会議にかけられて、軍
籍剥奪の上、召集をかけて衛生二等兵として使われま
した。海軍の取調では結局不起訴にしましたが、戦死
配置とよばれた非常に危険なところ、西部ニューギニ
アとか、あるいは潜水艦の危険なところへやられて
戦死者を多く出しています。その中を生き残った人た
ちは数年前までご健在でしたが、戦後、民医連運動の
中心になっていきます。

私が言いたいことは、日本の人民戦線運動は敗北し
た」という研究書がいくつも出されていて、私はそれ
を否定はしません、だけれども戦後、いたるところ
で民主運動を推進した人たちの中に、当時の学生運動
の経験者、あるいはその周辺にいた人たちが積極的な
役割を果たしたことを確認しなくてはいけないのでは
ないか。これが私が歴史学者の仲間に対して言いたい
ことなのです。あの運動は今になって改めて評価して

いいことがたくさんあるというのが私の主張したいこ
とです。どうもありがとうございます。

新著の出版を機に岩井先生を囲む懇親会 が1月
31 日京都平安ホテルで開催されました。

岩井先生の著書『十五年戦争期の京大学生運動—戦争とファシズムに抵抗した青春』の購
入希望について
別紙はがきにて「購入希望」と記入して返送
してください。振込用紙を同封して著書を送
ります。代金 2160円

